
罪には罪を

日中まさひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
罪には罪を

【Nコード】
N0660K

【作者名】
日中まさひろ

【あらすじ】
死刑を行うのは、被害者の遺族でなければならない。
そう法律で定められてから十年あまり。この日、死刑が執行される。殺人罪であり、執行者は息子を殺された者。
法律に則り、国が認めた復讐が今、執行される。

警告として。

この小説は、救いもなにもありません。ただただ、後味の悪さだけが残ることでしょう。作者としては読んで頂きたいところですが、

しかしオススメはけしてしません。

（前書き）

この小説はフィクションです。加えて、殺人を推奨するものでもありません。

死刑制度が一新されて十年以上を数えたと思う。

別段と、この国から死刑という刑罰がなくなつたと言つことではない。変わったのは、執行の方法。

受刑者に執行を行うのは、遺族自身の手でなければならなくなつたのだ。

当然ながら、条件はある。

一つに、執行者と受刑者が成人していること。

一つに、執行者は必ず一人であること。

一つに、この刑による殺人は罪に問わないこと。

賛否両論はあるだろうが、私は今、この刑法に感謝している。

私自身の手で、憎き殺人鬼を地獄へと送ることができるのだから、そう思うと、私の体が歡喜に震える。

まだか。

腕時計を見てから、待合室に備え付けられた時計を見る。アナログのそれらは、どちらも数秒の狂いだけで同じ時刻を指し示す。

ガタガタと落ち着きなく貧乏ゆすりを繰り返しながら、私は執行の時間をただただ待ち続けた。

ようやく時間が来て、私は係員の後ろを付いてリノリウムの廊下を歩いていく。

エレベーターに乗り、五階へ。受付らしきところで記帳をすませた後、所持品を控えていた係員へと渡す。死刑の様子を記録させないための処置らしい。問題ない。奴の末路は、私がしかこの目に焼き付けてくるのだから。

係員に促され、再び廊下を歩く。

心臓が脈打つ。床をはじく靴の音よりも高く、いっそう、耳障りなほどだ。

どれくらいを歩いただろうか。気がつけば、私は一つの部屋に入っていた。

何もない部屋だ。窓も、椅子も。

生活感はもちろん、誰かがいたと言う気配すらもない。

完全なる殺風景。

「こちらで執行を行います。方法は、事前に確認されていますね」
「もちろん。わざわざ、ビデオ講習まで受けましたから」

確認されるまでもない。人形を使って、首に縄をかける練習もした。

死刑の執行者は変われど、方法自体に変化は今のところない。死刑囚の首に縄をかけ、スイッチを押すと、足下の床が割れて落ちるという仕組みだ。

手ぬるい。率直に言えば、私はそう感じている。

叶うならば、奴には私の息子と同じ方法で、同じ苦しみを……いや、それ以上の苦しみを与えてやりたい。

息子の負った傷は、十を超える。

出会い頭にまず、腹部へと。その後は何度も何度も、繰り返して同じところを刺されたいらしい。

息子が何をした。

怒りや憎しみを除けば、ただその一言の疑問が鎌首を持ち上げる。息子が、何をした。

拳が白くなるほどに握りしめる。それをぶつけるべき相手は今、こちらへと向っているだろう。

私はただ、待てば良い。

この手で仇を討つために。

いよいよだ。

現実では五分。私の体感では一時間以上の時が過ぎ、ようやく奴がこの部屋のすぐそばまで来た。

ふつふつと、マグマのように粘ついた何かが腹の奥底から湧きだ

してくる。

「では、これから彼を部屋に入れますが。わかっていますね」

念を押してくる看守に、私は無言で首を縦に振る。体を強張らせていないと、どうにも我慢ができそうにない。

死刑の執行こそ許可されているが、囚人への暴行は立派な犯罪行為だ。ここで

激情に任せて奴を傷つけようものなら、私が刑にとわれる可能性も出てくる。

だからこそ、力を全身に入れてこらえる。

万が一にも殴らないように。

確実に、刑を執行するために。

ドアが開き、まずは監視員が入ってくる。

次が、奴だ。

歯を食いしばり、ともすれば飛び出しかねない体を必死に押さえ込む。

憎い。

マグマは瞬時に立ち上り、火山の噴火さながらに爆発する。

飛びかからなかったのは、きつと奇跡だ。

「これより、刑を執り行う。囚人番号九千五百四十七、前へ」

「はい」

いくらか震えた声で、奴は返答を返す。今更、人間らしい感情でも持ち合わせたか。

貴様は殺人鬼だろう。人並みに、恐怖など感じているんじゃない。ゆるゆると奴は前へ進み、部屋の中央へとたった。

振り返り、こちらへと姿を向ける。

ああ、いよいよだ。

いよいよ、仇を討てる。

「では、このロープを受刑者の首へ」

「はい」

無造作に手渡されたロープを、私はまるで騎士が剣を授かるよう

にうやうやしく受け取った。

ここからはすべて、私一人で作業を行わなければならない。
首をロープで縛り、天井のフックへと引っ掛けるのもすべてが一人での作業だ。

無言で作業を進める。しかし、無音と言うことではない。うるさいほどに、心臓が高鳴っている。

武者震いか、手が震えていてロープを上手く結ぶことができない。四苦八苦として、何とか結び目を作り出す。固く、キツく、二度と外れるようなことがないように。

途中、何度かむせ返っていたようだが、この程度は息子が受けた苦しみの十分の一にも満たない。

存分に苦しめば良いんだ。

苦しげな表情を浮かべる殺人鬼の顔を見ると、いくらか溜飲が下がる。

いつそのこと、このまま絞め殺してやりたい。

それは、とても良い考えのように思える。最終的には絞首するのだから、ここで直接手を下したところで問題はないはずだ。

ロープを握る手に、力がこもる。

犬が呼吸を繰り返すような音が、耳の近くで聞こえる。うるさい。

何度も何度も脈打つ心臓の音が体を震わせる。だから手が震え、上手く力が込められないんだ。

「君、早く次ぎに移りなさい」

監視員の声に、私は我に帰った。

危ないところだった。このまま絞め殺せば、それは死刑にならない。

深く、大きく息を吸い込む。まだだめだ。まだ、こいつを殺してはならないんだ。

私は、ゆっくりと作業を再開した。

しつとりと汗をかき、私は肩で息をしながらも作業を完璧に終えた。

後は、手元にあるボタン。これ一つを押すだけで、死刑の執行はなる。

「言い残したいことは」

監視員が最後にそう問いかけるが、奴は無言。

しばらくをそうしていたが、ややあつて諦めたのか、監視員が離れていく。

「では、執行を」

「はい」

ボタンを押す。ただそれだけだ。

仇を、これで討つことができる。

ようやく、だ。

はぁー、はぁーと呼吸を繰り返す。

暑い。のどが異常に渴く。

やはり、準備と言う重労働が効いているのか。

手が痙攣する。明日は筋肉痛だろうか。もう若くないから、もしかしたら明後日かもしれないけれど。

ボタンが、押せない。

早く、奴を殺したいのに。

気持ちはどんどん焦るのに、手が、ボタンを押すことができないでいる。

なぜだ。

私は、奴を。

時間だけが、ただ過ぎていく。

無意味な。価値のない時間が。

ただボタンを押す。それだけの動作が、なぜか私はできないでいるのだ。

なぜ、だろうか。

まさかと、思う気持ちがある。ありえないことであり、私のこの

身を焦がすほどの怒りからは想像することすら叶わないことだが。

私は死刑の執行をしたくないのだろうか。

まさかだ。私は奴をとことんまで憎んでいる。息子と同じ目にあわせてやりたくて、うずうずしているくらいだ。

だから、これは気のせいだ。

私が奴を、この憎い仇を、

殺したくない、などと。

「ははははははっ」

不意に、笑い声が起こる。誰の物かは一目瞭然。

私の眼前に立つ死刑囚が、奴が、うすら笑いを浮かべているのだから。

「言い残した言葉、だよな。一つだけある」

「許可しましょう」

監視員が私に目配せをする。聞き終えるまでは、押すなど言うことだろう。

問題はない。奴にはもはや、逃れるすべはない。だからこそ、私が慈悲の心を見せてやろうじゃないか。

監視員の方を向いて、男は礼を言う。そうしてから私のほうを向いて、言い放った。

「この、人殺し」

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。
人殺しだと。

誰がだ。

私が、か。

馬鹿な。ありえない。

人殺しは、息子を殺したのは。

「お前だろうか」

叫び、

私は、

ボタンを、

押した。

執行を終えた私は、抜け殻のようだったらしい。

あるはいはそれも必然だ。身を焦がすほどの憎しみは、私にあった生きる意味を根こそぎに燃やし尽くしたのだろう。今や、私の体には何も残っていないのかもしれない。

月日は流れ、仇を討ってから一ヶ月。

仕事にも行かず、食事も満足にとらないまま私は日々をこうしてテレビを眺めながら無為に過ごす。

今日のテレビでは再放送なのか、どこかで見た覚えのあるドラマが展開している。たしか、もうすぐに犯人を追いつめる推理シーンのはずだ。

始めの一週間は仕事に行っていた。ただ、止めたのだ。

あの目線に耐えられず。

私は賞賛されてしかるべきことをした。仇を、息子を殺した奴を地獄へと送りつけた。

なのに、なぜ。

私を見る目が恐怖に怯えていたのだろう。

あれでは、あれではまるで。

「そんなはずはない。私は、正しいことをした」
頭をふって、思いついた考えを打ち消す。

私は正しい。

誰だって思うはずだ。親しい人を、大切な人を殺されたのならば、仇を討ちたいと。

だから、それを成し遂げた私は正しいんだ。

「??だと言うのに、なぜ。今でもあの言葉を思い出すのだろうか。
「この、人殺し」

ギクリと、私は体を震わせた。

声は少女の物だ。奴の、ではない。

見れば、テレビの中で子役が犯人の男に詰め寄っているシーンだ。確か、復讐の為にこの犯人は殺人と言う手段をとったのだったか。子供を殺された復讐のために、罪に問われなかった犯人を殺す。けれども、殺された男にも家族がいた。一人娘が、父親を殺した犯人に問い詰めると言うこのドラマ最大の見せ場だ。

何を言うのだと、私は思う。

奴は人を殺した。だから、殺されて当然なんだ。

殺されて、当然。

殺されて……

「ああ、そうか」

やっと、わかった。

私があのと戸惑った理由。

私を見る目が変わった理由。

私が未だ立ち直れない理由。

死刑の執行とごまかして、その本質からは目を背け続けてきた。

私は正しいことをした。その思いに変わりはない。けれども、これは認めなければきつといつまでも私は立ち上がれない。

会社の同僚たちの目は、真実を物語っていたのだ。

つまりは、

あの日、

私は、

「人を、殺したのか」

（後書き）

ここまで読んで頂き、まことにありがとうございます。

死刑の是非を問うときに、賛成の声をあげる人の中にこういう人がいます。

「遺族のことを思うと、やはり死刑はあるべきだ」

たしかに、感情を主軸にすればそれは納得のいく理由です。

けれども、それは手を下す相手が違うだけで殺人なのではないでしょうか。

許せない。憎い。だから、死刑にする。これではただの復讐です。ここで少しだけ、意地の悪い裏設定を一つ。

劇中の『私』の息子が『囚人』に殺されたのは、『囚人』の息子が『私』の息子にいじめられており、それを苦に自殺したから。

つまり、復讐です。

感情を主軸に考えると、囚人の行為もまた正当な物だと言えるしまうんですよ。

みなさんがいかなる感想を抱くかは、僕には想像することすらできません。ですが願わくば、それらをお聞かせいただきたいと思います。

最後になりましたが、この小説は春樹亮さんの『切なく悲しい物語』をきっかけに執筆した作品です。氏には許可を頂いておりますが、この場を借りてもう一度、お礼申し上げます。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0660k/>

罪には罪を

2010年10月8日15時42分発行